

歴史のロマン かきたたて

檜山管内上ノ国町の夷王山（いおうざん）（159メートル）に登ると、眼下に天ノ川が日本海に注ぎ、河口の両側に湾曲する海岸線を一望できる。中腹に広がるのが1470年代に築城された山城「勝山館」の跡だ。城には推定200戸近い和人とアイヌ民族とが一緒に1世紀以上も暮らし続けた。現地に立つと、500年前の中世へのロマンをいや応なしにかきたたてられる。23年前に始まった発掘調査で既に10万点の遺物を掘り出し、今後も続く。

◆アイヌ民族と

北海道遺産に選定されたのは15世紀の和人の山城、勝山館、花沢館と洲崎館の跡。中でも勝山館跡は35ヘクタールと最も大きく、発掘も先行している。二つの沢に挟まれた小高い丘という地形を利用して自然の砦（とりで）であり、漁師や鍛冶屋も暮らす生活圏だった。

勝山館を築いたのは松前藩の祖とされる武田信広。武田は花沢館のあるじ、蛸崎季繁の客将として1457年のアイヌ民族・コシヤマインとの戦いに勝ち、その手柄で洲崎館を築き、やがて新しく築造した勝山館に移り住んで地歩を固めた。

発掘調査で、館の背後の650基の墳墓群から和人の墓の間にアイヌ民族の墓も確認され、両者の「混住」が確定的となった。当初から発掘調査

に携わる同町教委文化財課主任学芸員の松崎水穂さん（55）は「和人对アイヌという対立的な図式ではこうはならない。お互いに受け入れていたのではないか」と話す。

館主が住んでいたらしい住居跡から、専用井戸や鉄・銅の加工場跡も確認された。陶磁器、木製の浮き（漁具）、ニシンやマダイの骨、アイヌ民族が作ったとみられるシカやヒグマの骨の狩猟道具（骨角器）など、人々の館での暮らしの遺物も多数発掘された。

◆防御に優れた館

勝山館の正面に行くには木々が生い茂り、S字カーブの上り坂が連続する細い山道をたどるほかない。館を攻撃する側は見通しが利かず、自分を防御兵に裸でさらすことになる。

15分ほど登ってようやく視界が開く。勝山館は段々畑のように3段の平坦（へいたん）部に区切られる。手前の第1平坦部と中央部の第2平坦部との間には、深さ8メートルのV字形の空堀（水を張らない堀）が22メートル間隔で2列横たわり、館を守っている。空堀を築くために掘り取った土量は10トンダンブカー1100台分にのぼった。

背後のからめ手にたどり着くことも地形的に難しく、防御能力に優れた館だったようだ。